

論文審査結果の要旨

論文提出者氏名：張旭梅

「人間の安全保障」プログラムに提出された本論文は、2000年代の中国で大きな社会問題となってきた農村から都市への出稼ぎ者、いわゆる「農民工」の権益保護について、その「ネットワーク」の実態を究明することで、問題解決に向けての糸口を見出そうとしたものである。

中国の農民工をめぐる研究は、社会的な注目度の高さもあり、現在までに一定の蓄積がなされている。都市部の社会福利の対象外となる農村戸籍を保持したままで就業しているため、様々な公的な保護を得られない中で、自らのもつ地縁・血縁関係などに頼って、都市での就業中の様々なリスクに対処している点が知られるようになった。そうした意味で、農民工のネットワークに関する分析も近年、徐々に行われるようになってきている。ただし、ある特定の業界に焦点を絞った農民工ネットワーク論はまだ少ないうえ、導き出された結論も総花的になりがちで、当事者の生活改善に対しての実践的インプリケーションも持ちにくかった。こうした状況に一石を投じ、対象を建築業界に絞ったうえで、北京における詳細なフィールド・ワークを通じて、農民工の生活実態に寄り添いながらネットワークの特質とその意義とを再検討したのが本論文である。

本論文は序章と終章を除き5つの章で構成され、分量はA4版で161頁である。以下、各章ごとの内容を要約したうえで、審査結果について述べたい。

序論では問題の背景と現在の先行研究の状況を踏まえ、「農民工のネットワークについては、多数の量的、質的研究がなされてきたが、特定の業界に焦点を当てた研究はまだ限られている」とし、そのうえで数が多く、労働条件が過酷な建築業界を取り上げることの研究意義について述べられる。第1章「建築業界と建築業農民工」では、中国建築業界の歴史を振り返りながら、建築業労働者の数、賃金、属性などの概況を紹介し、建築業界に特殊な複数企業間の請負関係について詳述している。第2章「能力のある個人—『包工頭』」では中国建築業界において農民工と最も緊密な関係を持ち、建築隊の取りまとめ役であるについて議論が展開する。「包工頭」はしばしば農民工給与未払いの元凶であると目され、しばしば政府の取り締まりの対象となってきた。これにたいし、本章では政府規制に対する「包工頭」の側の対応が分析され、さらに建築労働者の訓練、労務企業への労働者の供給、労働者の管理などにおける彼らの「貢献」した側面が見出されている。第3章「農民工向けの社会保障制度の現状と課題」では1980年代初期から最近にかけての農民工社会保険制度の変遷を振り返りながら、制度の現状と課題を考察し、建築業農民工の現状についても紹介する。そのうえで、他の業界と比較して、建築業界では労災保険、医療保険の加入率がかなり低い、という問題点が指摘される。

第4章「建築業農民工のネットワークと安全保障」以降は、本論文の核心部分である。まずネットワーク分析の手法が紹介された後、著者が2007年および2009年の二つの時期に独自に行った現地調査の結果に基づいて、調査対象企業の組織構造と調査対象者のプロフィールが記述される。そのうえで、農民工らの「情緒的サポート・ネットワーク」、「道具的サポート・ネットワーク」、「交際的サポート・ネットワーク」の具体的な中身が明らかにされる。さらに天津、南京、深圳などを対象とした先行研究で見出された農民工ネットワークと、北京市建築業農民工のそれが比較されている。さらに、近年、注目されてきている若年のいわゆる「新世代農民工」についても項を設け、そのネットワークの特徴を分析している。第4節以降では、現地で聞き取った具体的な事例を検討しつつ、これらネットワークが「情緒的サポート」「道具的サポート」「交際的サポート」の諸局面でのリスク回避において実際にどのような役割を果たしているかが述べられる。最後に給与トラブルをめぐる問題、とりわけその中の農民工と「包工頭」の関係が事例に基づいて検討される。その結果、両者の関係は、農民工にとっては出稼ぎ先の保障となるだけではなく、給料が持ち逃げされる、未払いされるなどのリスクを下げる効果もある、と指摘される。続く第5章「建築業農民工ネットワークの特徴及び形成要因」は、第4章の研究結果に基づき、実際の建築業農民工の労働と生活実態の記述から、彼らの同質性と密度の高いネットワークの特徴を掘り下げて分析している。最後の結論では、建築業界に特有の労働・生活環境が農民工のネットワークの特殊性を生み出しているとしたうえで、「包工頭の再発見」として、従来の言説では農民工問題発生の根源のように見なされがちであった「包工頭」の積極的な役割を再確認する。さらに政策的なインプリケーションとして、建築業農民工のパーソナル・ネットワークがカバーできないのは、養老保険・失業保険よりも労災保険・医療保険であり、これら領域での制度環境を充実させるべきであるとしている。

以上が本論文の概要であるが、そのメリットとしては以下の三点を指摘できる。

第一に、建築業界という一つの業界に焦点を当て、具体性のある結論を引き出したことである。すなわち、中国の農民工が二億人をはるかに超えている現在、もはや「農民工問題」を全体としてとらえるのではなく、「特定業界研究」の遂行こそが急務である点を、本稿のアプローチは示している。今後の農民工ネットワーク研究が、例えば「製造業界」「飲食業界」「家政婦業界」など様々な業界について研究を深め、異なる業界では異なる形のネットワークが存在し、また有効なリスク回避の在り方も異なっている、との前提で臨むべきであることを、本論文は提示したことになる。

第二に、農民工問題に限らず、「ネットワーク分析」の手法を用いた研究に不足がちであった、質的なデータの使用がある。本論文では、フィールド・ワークを通じた現場の観察や、大勢の農民工へのインタビューに基づき、研究対象の労働・生活実態について厚みのある記述が行われている。これにより、ネットワークの構造のみならず、それを決定している社会的・制度的な背景の説明を加えることに成功している。

第三に、以上のような研究手法を用いて実態に迫ったことで、結果的に本論文は、中国の多くの「三農」(農業・農民・農村)問題研究が陥りがちであった、実態から乖離した政策提言のレベルを超克できている点である。内容紹介で触れた「包工頭の再発見」はその一つであろう。これは、安易な包工頭批判に流されず、彼らの関係が通常、同郷関係で構成されるために、出稼ぎ先の確保や給料持ち逃げ、未払いなどのリスクが軽減されている、という農民工の現実に肉薄することで得られたものである。もとより、筆者は包工頭が常にプラスに働くと述べているわけではなく、時としてネガティブな作用を持つことも直視したうえで、あえて積極的な作用の再発見の重要性を主張しているのである。さらに、「現場で働く農民工は子供の学費、結婚資金など、家計を支えるために、現場で働き続けている」点を見出し、このような負担がなくなったとき、ほとんどの調査対象者は実家の農村に帰る、と述べていたことから、先に述べた如く農民工が都市に居続けることを前提とした養老保険・失業保険よりも、むしろ労災保険・医療保険の整備の方が切実である、という。こうした観点は、農民工を「市民化」することを前提とした多くの既往研究に対する批判ともなり得ている。もちろん、いわゆる「新世代農民工」の場合、一般に都市部に止まりたがる傾向が強いとされるものの、建築業農民工は相対的に高齢の「旧世代」労働者が多いという事実を照らせば、業界を限定したうえでの上記の提言は尚、説得性を有するものといえる。

以上のようなメリットの反面、審査員からはいくつかの疑問点も提出された。第一に、中国の建築業者の生業形態や結びつき方について、本論文は概して国際的な視野から特徴づける視点が弱い点である。例えばまたプロ集団が担う日本の建築業界と、農民工が担う中国の建築業界の違い、あるいは国際的に見た場合の中国の出稼ぎの特徴などについて、本稿の議論はあまり留意していないように見える。第二に、歴史的あるいは時系列的にみた建築業界の変化、たとえば建国以前の建築業界の実態や、近年来のネットワークの変化、今後の変化の可能性についても、本稿はやや目配りを欠いている。第三に、ネットワーク分析の差異のデータの扱いについても、より慎重を期すべき点がある。例えばもともとのネットワーク規模の大小によって大きく異なって見える「ネットワーク密度」の扱いなどである。

ただし、以上の不足の一部は、むしろ今後のよりスケールの大きな出稼ぎ研究に向けての審査員からの助言であったともいえ、それらは決して本稿が「中国農民工の人間の安全保障」研究にもたらした理論的・実践的貢献の価値を減ずるものではない。以上を総合的に判断し、審査委員会は本論文が博士(国際貢献)の学位を授与するにふさわしいものと認定する。